
俺と獣と腐った世界と。

通行人A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と獣と腐った世界と。

【Nコード】

N0027U

【作者名】

通行人 A

【あらすじ】

ある日江戸に現れた一人の男。

その男はある人物と瓜二つだった…！

お知らせ

お久しぶりです。

久しぶりにこの小説を読み返してみたのですが、あまりにも未熟さが目立つな、と思ったので一話からもう一度書き直す事にしました。

未熟さは変わっていませんが、また頑張って書いていきたいと思っています。

お気に入り登録してくださった皆様、通りすがりに読んでくださった皆様。

本当にすいません！

更新はそんなに早くないと思いますが、以前よりもっと楽しんで読んでいただけるよう、日々精進していこうと思います。

新しくなった「俺と獣と腐った世界と。」を楽しんでいただければ幸いです！

通行人 A

他人のご厚意はありがたく受け取ろう！これ常識！！（前書き）

楽しんでいただければ幸いです！（o^ ^o）

他人のご厚意はありがたく受け取ろう！これ常識！！

静まれ。

鎮まれ。

遠吠え

唸り声

喘ぎ声

聞こえるか？この声が。

聞こえないのか、この声が。

早く

早く

この鎖を解いておくれ…。

「…やっぱり江戸は活気があんなあ。」

ジャリ、ジャリ、と新しい地の地面を踏みしめる。

前日に降った雨でぬかるんでいる地面には沢山の足跡が残されていた。

その足跡の数はこの町の人通りの多さを物語っている。つまり活気があるという解釈でいいのだろう。

俺が以前いた田舎とはえらい違いだ。

「さすが、日本の中心地なだけあるってか…。」

賑やかな町の向こうにそびえ立つ、この地にまるで不釣り合いな建物。人通りの中に《人》でない者が混じっている原因の一つ。

《天人》

…てか、人混みの中に緑の肌が見えるんだが…。

はつきり言つとキモイ。

何であんなのとすれ違って平然とできるのかが理解できん。

「よっ！そこのいかしたあんちゃん！！団子食ってかないかい？」

そんな事を考えながら、特に目的も無くぶらぶらと歩いていけば、団子屋の主人に捕まった。

…めんどくさッ！

「…いや俺は」

「何だいあんちゃん冷たいねえ。若いうちからそんなんじゃ、いつか嫁さんに愛想尽かされて出て行かれちまうよ。」

余計なお世話だ。

何で会ったばかりの人間に将来の心配までされにゃならんのだ。

「…俺は別に」

「ケチケチすんなよあんちゃん。今ならサービスするよ。」

「じゃあ遠慮なく。」

即答した。

他人の悪意を受け取る趣味は無いが、好意はありがたく受け取っておくべきだ。

これ俺の教訓。

俺の変わり身の速さに驚いたのか、主人は暫くポケットとしていたが、我に帰ると苦笑いをして言った。

「…あんちゃん…。現金だねえ…。」

そんな事を言われても、サービスすると言ったのはそっちなのだが、俺は悪くないと思うのだが。

現金？そんな言葉は生憎俺の辞書には載ってないな。何それ美味しいの？

安いと言われて飛びつくのは人間の性だと、俺は言い切ろう。

その言葉を思わずポロツと口にしてしまった俺は、苦笑いを浮かべていた主人に大爆笑された。

…初対面で失礼すぎやしないか？店長。

「はいおまち。たっぷりサービスさせてもらったよ。」

主人が俺の席に、大量の団子と大量の餡子が乗った皿を置いた。

…これサービスってレベルじゃねーだろ。

皿の上には、団子と餡子が見事なコラボレーションで、これまた見事な山を築いている。
江戸城も真っ青だな。

というか、これだけの量をサービスとか、そんなに儲かってんのかこの店。

これ確実に赤字ルートだぞ。赤字ロード突っ走る羽目になるぞ。家計が火の車になるぞ。

もしこの店潰れても俺は責任取らないからな！！

…とか言っつて、しっかり団子の山を消化していつてる俺。
中々美味い。

実は俺は結構な甘党だったりする。だが、この事実を人に知られる度に疑いの眼差しと爆笑をプレゼントされる訳だ。

…失礼な。

そんなに俺が甘党なのが可笑しいか。

確かに目付きが悪いし、甘味をつついてる姿は想像しにくい顔をしていると思うが。

…あれ？これって結局顔が原因なのか？

因みに、この団子の山、爆笑料も含まれているらしい。

実はあの後、主人は俺の発言で、十分程笑い続けていた。

十分笑った後、こんなに腹の底から笑ったのは久しぶりだとか、腹筋が炎症起こしそうだから後で病院行ってくるだとか、褒められてんだか、貶されてるんだかよく分からん言葉を頂き、主人は厨房へ引っ込んで行った。

…で、戻ってきたら皿一杯の江戸城を持ってきた。

爆笑料金分だとかで。

…爆笑料って何だ。

「そついや、あんちゃん江戸（此处）の人間じゃないだろう。観光かい？」

黙々と団子を消化し続ける俺を暫く観察していたかと思うと、主人が突然そう切り出した。

…正直、その質問には困る。観光に近いものもあるが、特にこれといった目的も無く、ただぶらぶらしているだけだからな。

「…まあ観光みたいなもんだな。特に目的も無いし。」

「そうかい。江戸はどうだい？活気があって良い所だろう？」

「…まあ良い所だとは思いますが、天人が目立つな、此処は。」

まあ、ぱつと見の此処の印象はこれだったからな。

「…そうだねえ。最初見た時はビビったものだが、人間って怖いもんだねえ。」

時が経てば、そこそこ慣れちゃった。」

「…」

「まあ、所詮時の流れだよあんちゃん。」

主人は少し寂しそうだった。

…まあこの主人の歳なら天人が来るまでの平和な江戸を知ってるだろうしな。

少々複雑な部分もあるのだろう。

俺は団子の最後の一本を食べ終わると、席を立った。

「ごちそうさん。美味かった。で、いくら？」

「…あんちゃん、行く宛はあるのかい？」

「ん？」

俺が勘定を済ませようとする、主人は唐突にそう口を開いた。

行く宛と言つても…。

「…どっかの宿に泊まると思うが…。」

まあ、基本的に根なし草だからな。

しかし、主人は何故そんな事を言い出したのだろう。

俺は僅かに眉をひそめた。

「うちで働かんかい？住み込みで。」

「…はああ!？」

どついう流れでそついう事になるんだ。痴呆か？

「住居も提供するし、給料も出す。どうだい？悪くない条件だと思
うんだがねえ。」

「いやいやいや、ちょっと待て。」

何故そつなつた。

俺はらしくもなく、珍しく動揺した。

「何かおかしい事言つたかい？」

「しつて言つならさっきの発言全てがおかしいな。」

何故初対面で少し話しただけの俺にそこまでする。確かに悪くない条件ではあるが。

「そうだねえ…。ようは俺はあんちゃんが気に入ったのさ。」

「…は？」

気に入ったって…。

俺は思わず呆気にとられた。

「…あんたお人好しすぎだろう。いつか騙されんぞ。」

「おやおや言うねえ。ならこのお人好し爺のご厚意に甘えてみる気はないかい？」

主人は俺の言葉に気分を害したようでもなく、茶目っ気たっぷりにそう言い放った。

…お人好し爺に甘えるのも一興、てか？

誰でも気に入らない呼び名ってーっはあるよね？（前書き）

ー話目です。

誰でも気に入らない呼び名って一つはあるよね？

時に俺は思う。

朝は惰眠を貪るための時間であると。

朝は俺達人間の中では、「起きる時間帯」と認識されているが、正直それは間違っていると思うのだ。

朝に起きるといふ方程式は言わば、個人的な意識に過ぎない。必ずしも朝に起きる必要は無いし、そう定められているわけでも無い。

なら何故、人間は”朝”に起きようとするのか。

それはつまり、人間の本能にプログラムされているのだろう。だが、たとえプログラムされていようが判断するのはまた別のもの。

当然そのプログラムに逆らい、朝に起きない者も多い。

…今更だが今でこそ朝に起きる行為が根付いているが、もしかしたら昔は夜に起きる時代もあったかもしれない。

古き良きものが段々と失われていく今、昔の風習を忘れない事も大切だと俺は思う。

という事で俺は古き伝統を守り、本能という名のプログラムに逆らおうと思います。

「じゃあちよっくら寝て…」

「んなわけあるかああ！！！」

…チツ。

思い立つたら有言実行、俺の素早い隠密行動は爺もとい主人に阻止された。

「何だよご主人。俺はたつた今から自由の翼で布団へ羽ばたこうとしているんだが。生憎俺にはそんな趣味は無いんで、襟元を掴んでるその腕を離してくれると有難いな。」

「俺にもそんな趣味は無いわああ！！！！！」

「じゃあ何なんだよ何でこんな朝っぱらから活動しなきゃなんないの人間の活動開始時間は十時ぐらいからだろうが。」

「何ヘンテコな理論立てて自分を正当化しようとしてんの！？余所は余所、うちはうち！！うちは早起きの！！！」

「ご主人、最初のお人好しの悪徳商人キャラが崩れてるぞ。」

「誰のせいだああ！！！！！」

おい。

悪徳商人ってところは否定しないのか。

そんなこんなで、昨日団子屋の主人に宗教勧誘の如く、働かないかと誘われ、何となく承諾した俺だったが、今現在進行形で早朝からさっそく駆り出されている。

…ちなみに朝五時に叩き起こされた。
定番の布団ひっぺがしで。

あんたはおかんか。

「たかが団子屋、されど団子屋！商売やってんだから朝早いのは当たり前だよ。」

「…ふあい。」

欠伸混じりの返事を返す。

…ようするに、開店準備中ってわけだ。現在進行形で。

「まあこれからバリバリ働いてもらうよ俊坊。」

「こきつかいまくる気満々じゃねーか。
…俊坊はやめてくれって言うてんだろ。」

そう、昨日当然ながら主人に名前を聞かれ、答えたところ、何を血迷ったのか俺に「俊坊」等という呼び名を付けてくださったのだ。

俊坊って…。

俺「坊」で呼ばれる様な歳じゃないんだけど。

この歳で俊坊ってかなり恥ずかしいんだが。

と、散々反論してみたものの、主人は全く聞く耳を持って無い。どうやら何を言っても俺の呼び名は俊坊で通すつもりらしい。

…もう俊坊でいいわ。

俺はいちいち反論するのが面倒臭くなり、自分の中で自己完結させた。

店の戸を開け、暖簾をかける。

…じゃあいつちよ、仕事しますか。

充分細いのに「最近太った〜」って言う人って何かイラッとする。(前書き)

一部修正しました。突然ごめんなさい！

充分細いのに「最近太った〜」って言う人って何かイラッとする。

「俊坊ー！これ3番テーブルに持ってってくれー。」

「へーい。3番ねー。」

「お兄さーん注文お願いー!!」

「はーい！ご注文は…」

…猫の手も借りたといってこつこつ時の事を言うんだな。

店を開店させて三十分足らず、店内はかなりの大人数で賑わっていた。

俺は今、客の声とテーブルの間で忙しなく足を動かしている。

苺パフェ、餡蜜、団子、大福、チョコレートソースがけ、間違いの無いように俺にしては珍しく慎重に注文をとっていた。

「爺ーい。チョコレートソース并追加ー！」

「あーはいはい!」

俺がさつきとった注文を聞くと、主人は慌ただしく厨房を行ったり来たりしている。

その動きは歳を感じさせない程若々しい。

…結構歳いつてるはずなんだが…。

「はいよ、これ五番テーブルに持ってつてくんな。」

目の前にドンと豪快に置かれたやや個性的な注文品を見つめながら、俺はらしくもなく、思わず口を開いていた。

「爺いあんた、こんなに忙しいのに、今まで一人で店やってたのか？」

主人は俺の問いに、まるで珍獣でも見かけた様に目を丸くすると、皺の寄った目を細めた。

「…そうだねえ…。婆さんが死んじまってからは、ずっと一人でやってたねえ…。」

主人は、今の店の状態を忘れたかの様に、静かに言った。

「爺い…。」

「…まあ俺もまだまだくたばる気は無いんでねえ。この店を辞めるつもりは無いぞ。」

爺い…あんた…

「その面と性格で嫁貰えたんだな。」

「どつという意味だゴラアアア!!!」

そのままの意味だ。

「俊坊、お前さんこそ、その曲がりくねった性格を直さんと婿の貰い手がないぞ!!!」

「大丈夫だ俺若いから。あんたよりは高確率で貰い手あるから。」

「ちよつと良い顔してるからつて調子乗ってんじゃねえぞ俊坊!!!」

あまりの言われように素で答えたら頭をしばかれた。

だから何で将来の事まで心配されなくちゃならんのだ。

俺は殴られて少し痛む頭を押さえながら、仕事を再開した。
相変わらず、店内には客がびっしりという。

この朝っぱらから甘味を食いにくるとは…江戸の人間は暇人なのか？それともあれか？この甘味達に何か仕込んでるのか？

あの狸爺いならやりかねないとメニューをガン見していると、怒声
と拳骨が飛んできた。

「いつっ…!!」

「さつさとお客に届けてきな。」

暴力反対。

…さつきから俺、殴られてばっかだな。

グギユルルルル…

「…ん…？」

…何か店の外からでかい音がした様な…。

「我慢アル…。この音は気のせいネ！け、決して食べたいとかそんなんじゃないネ！！」

次いで高い、少女のものであろう声も聞こえる。

気のせいじゃなさそうだな…。

俺は、客に注文品を届けると、好奇心に負けて店の外に顔を出してみた。

「…あ？」

店の外にいたのは13・14歳程の少女だった。

異常な程に白い透ける様な肌、オレンジ色の髪、海を思わせる深い青色の瞳、そして晴れだというのに傘をさしている。

きわめつけはチャイナ服。

何か何処かでこの特徴聞いた事あるような気がするが…。まあ、地球人でないのは確かだな。

「…何してんだ？そんなとこで。」

「！？」

相変わらず俺に気づく事なく、店の前で何事かブツブツ呟いているので声をかけてみた所、声をかけられるのは予想外だったらしく、かなり驚いた様子で振り向かれた。

「な、何もしてないアル！ただメニューを見てただけネ！」

「…そうか。」

んな必死に弁解しなくても。

「だ、大体お前！何も言わずにレディーの後ろに立つのは失礼アルヨ！…！」

「そりゃ悪かったなお嬢さん。ずっと店の前にいたからどうしたのかと思っただね。」

何だかこの子面白いな。聞いてもいないのに本当に必死だ。

「ずっとじゃないアル！ちょっと見てただ…『ギョルルル…』」

「……………」

俺と少女の間に気まずい沈黙が走った。

…モギユモギユゴクンパクパクゴキユ

「……………」

沈黙。

俺と主人は目の前の光景に沈黙していた。現在進行形で。

目の前では先程の少女が凄い勢いで甘味を平らげている。それはもう、表現できないような。

たまたま出会った少女が規格外の大食いだったなんて、誰が想像できようか。

見た目はかなりの美少女だと思うのだが、中身と外見は一致しないものらしい。要するに外見で人を判断してはいけないという事だろう。勉強になったなうん。

「じちそうさまアル!!」

「…お粗末様。」

甘味の器を見事に空にすると、少女は輝かしい笑顔を俺に放ってき
た。

「美味しかったアル!!」

「…そりゃどうも。だが作ったのはそこにいる爺だから礼ならあつ
ちに言ってくれ。」

爺も少女の食べっぷりには引いていたが、美味しかったと言われて
は満更でもないらしい。やけにニコニコしていた。

「それにしてもよく食べたな。最近食ってなかったのか?」

あまりにも腹の音が五月蠅いので、同情心から爺に頼んでおごつた
のだが。

「最近はずっとパンのミニだったアル。」

「……………」

…何でパンのミニ?

どついつ食生活だよ。そりゃ腹空くだろ。

「最近依頼が来なくてただでさえお金無いのに、銀ちゃんがパチン
コに使っちゃったアル。」

「たくあのマダオが、と少女は毒づく。

「本性出てるぞお嬢さん。つまり全ての元凶はその銀ちゃんとやらなわけね。」

「てかマダオって何だ。」

「マダオってのはまるでダメなおっさんの略アル。」

「最悪な略だな。俺は死んでも呼ばれたくない。」

「依頼っていうと嬢ちゃん、万事屋のこの子かい？」

すると、今まで会話に参加してなかった爺が突然割り込んできた。

「万事屋？」

「何だそれは。眉を寄せた俺の問いに答える様に爺が話しだした。」

「ここらじゃ結構有名でねえ。まあ何でも屋みたいなもんさ。…オナーはちよつとあれだ、マダオだけどね。」

「…爺ちゃん銀ちゃんの事知ってるアルカ？」

少女は、まるで知り合いであるかのような主人の物言いに首を傾げた。

「ああ知ってるもさ。バツチりとツケがまだ残ってるからねえ。」

「金欠の上にツケまであんのか銀ちゃんとやら…。」

「チツ、マジでどうしようもないマダオネ。爺ちゃん、帰ったら私
がこつてり絞つといてやるネ！」

「おや、頼もしいねえ。任せたよ嬢ちゃん。」

「まかせてヨ爺ちゃん！このかぶき町の女王に不可能は無いアル！
！」

爺と少女はいつの間にか銀ちゃんとやらをどうシメるかで盛り上が
っている。

まあ何かあれだ。ドンマイ、名しか知らぬマダオ殿。

「兄ちゃんと爺ちゃん、おこつてくれてありがとうアル！私そろそろ
帰るネ！」

少女は爺と話し終わると、さっきまでの様子が嘘の様に、元氣一杯
に椅子から立ち上がった。

まああれだけ食べりや、元氣にもなるだろう。

「ああまたな。…えーと」

「神楽ネ！私神楽っていうアル！」

俺が何て呼べばいいかわからず口ごもっていると、少女はそれを察
したのか自分の名を教えてくれた。

「…神楽か。良い名前だな。」

「私も気に入ってるアル！兄ちゃんは何て名前アルか？」

「…俊助だ。高橋俊助。」

少女、もとい神楽は俺の名前を聞いて満足したのか、見えなくなるまで手を振って帰っていった。

「俊助兄ちゃん、私また遊びに来るネ！」

神楽が、家に帰った後本当に銀ちゃんとやらをシメるのか見たい気が無かったことも無いが、俺は仕事に戻ろうと、神楽を見送った後、店に向かって歩を進めるのだった。

王道展開、非王道展開、貴方はどちらがお好み？（前書き）

俊助君と主人の雑談が殆どなので、話はあまり進んでないです…。

王道展開、非王道展開、貴方はどちらがお好み？

「強盗お？」

何だかんだで働き始めて二日目。

何だか知らんが、変な噂を耳にした。

「そう強盗。」

爺はカウンターに寄りかかり、何時もの笑顔を消して神妙な顔つきで俺にその言葉を告げた。

「…強盗がどうしたんだ？このご時世そんなに珍しくないと思っぜ？」

天人がはこびっている今、政治やら経済やらは天人が牛耳っていると言っても過言では無い。

”侍”が多く存在していた昔ならともかく、天人中心の政策なら当然失業者やらが増加する訳で…。

「俊坊の言う通り、別にそんなに珍しくないんだけどね…。」

「とうか、強盗が狙うのは銀行やら大企業やら、まあ金がたんまりあるところを狙うだろう。」

「こう言ってしまうては不謹慎かもしれないが、爺には少しも関係がないのでそんな警戒する必要はあまり無いと思うのだが。」

「せいぜい人質に取られたりして、巻き込まれないように気をつける事ぐらいしか一般人には対策方法がない。」

「だというのに何故そんな顔をしているんだか。」

「ところがどっこい、その強盗さん、銀行とかは狙わないんだよ。」

「…ん？ 狙わない？」

「…はあ？ 銀行狙わないなら何処狙うんだよ。」

「銀行強盗って強盗にとつたら、ロマンみたいなものかと思ってたぞ。」

王道だしな。

「銀行を狙わず、茶屋や老舗やら、儲かってそうな比較的小さな店を狙うのさ。」

「…それはまあ随分と変わってるな。」

王道嫌いかその強盗。

「じゃあ、心配ないよな。この店は標的にならんだろ。」

「俊坊！。話聞いてたかー？」儲かっている”店って言ったよね？」

「言ったな。だから狙われる可能性は低いつて…。」

「てめえの目は節穴かあああ！！昨日お前さんは何を見た！？客満員だっただろうがああ！！！」

ああ見たよ見たともさ。

「それは、まああれだ。店が狭いから客がいっぱい入っているように見えるって…。」

「勘違いってか！？脳の認識間違いつてか！？そう言いたいのか！！！」

誰もそんな事言っていないっての。
被害妄想はよしてくれ。

お人好しの上に被害妄想が激しいなんて救いようが無い。いや本当に。

「心配するなよ爺。んな都合よくピンポイントでこの店が狙われたりしないよ。」

…という爺との会話があったのが丁度今朝頃。

「金を出せえええ!!客がどうなってもいいのああああ!!!!」

…どうしてこうなった!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0027u/>

俺と獣と腐った世界と。

2011年11月20日20時04分発行